

枕草子の夏と冬

——前田家本本文を中心に——

安藤 亨子

(一)

枕草子は、人ごとに持たれども、まことによき本は世に
ありがたき物なり。(四六九)^①

伝能因所持本の奥書にこう記されたように、枕草子はその本文を一本化し得ない作品である。その中で、前田家本は他に写本を有しない、いわば特異な一本であり、しかも書写年代は諸本中で最も古い。しかしながら、三卷本の本文と比較した場合、やや冗漫な表現といわざるを得ない面をもっている。その例として、「夏は」と「冬は」とを次にあげてみる。

夏は日いたう照り、扇などかた時もうちおかず、耐へが
たう暑き。なのめなるはわろし。(六)

冬は雪、霰がちに氷し、風はげしうていみじう寒き、よ

し。(六)

この二つの季節について、三卷本も能因本も、ともに

冬はいみじう寒き、夏は世にしらず暑き^③

としか述べていない。夏は暑く、冬は寒い。それが、どのような理由で良いのか、また良くないのかなど問題にしていない。いわば必要最少限の表現になっているのである。

ところで、先に掲げた前田家本の表現は堺本と同じで、既に指摘済み^④の、前田家本の書写態度、即ち「堺本の形態に準據」としていることの証左の一つといえるのかもしれない。

一方、前田家本には、いわゆる日記的章段のまとまりもあり、その本文が能因本と関わることも指摘済みといえる。即ち、

前田家本は伝能因本と堺本とを底本として集成して作られた後人による改修本である。^⑤

との一文にみられるように、前田家本の性格は右のように提示されているといえる。これが詳細な検討の結果から導き出された結論であり、浅学の稿者には何程のことと言及し得ないし、またこの御論に基本的にはよっているといえるわけであるが、「後人による改修」という点に多少の疑念が生じた。以下、夏と冬と、二つの季節を採りあげ、本文相異から推察されることを述べてみたい。

(二)

「夏は」「冬は」の項目は四系統とも存在するが、前田家本のみが、夏、冬の順序で取りあげられており、それも「後人の改修」を考える根拠の一つになるといえるかもしれない。だが、その特異性は前田家本の編纂意図を示しているのであって、それが「後人」による操作、「改修」とはならないのではなからうか。「後人」ではなく、清少納言その人の意図と解する立場は成り立たないものなのか、つまりは前田家本の形態での一本の存在の可能性を探究してみようとするのが本稿である。

まずは項目として「夏は」「冬は」を掲げる前後の項目表現をあげてみよう。

前田家本は「正月一日、三月三日」という節日を扱った次に「夏」「冬」の順で配され、次には「日は」の項目が来ている。

これに対し、本文自体には大きな相異を有しない堺本の場合、「しぐれ・あらはいたや」と、「つかさは」との間に、「冬」「夏」の順で配されており、それぞれに関連性が考えられる。即ち時雨や霰のつながりとして「冬は」があり、正反対の季として「夏」を配した後には「つかさ」が取りあげられているが、これは暑さの中での印象深い出来事であった小白河の洛時邸での、法華八講に集った「左右の大臣達をおきたてまつりては、おはせぬ上達部なし」の状況を連想させるものといえようか。むろん堺本にはこの小白河での一件を記した章段は存在しない。それだけになお一層、この連想がこの章段配列には働いていると捉えておきたいのである。とすると、前田家本だけが連想の手法がみられない本となり、「後人の改修」を云々せねばならないかもしれない。だが、ここには適応できないものの、連想性は指摘できるように思える。作者について、再考が要請されるべきかもしれない。

ところで、右に見た限りでもわかるように前田家本の章段配列は、まずは時間の流れに沿うのが原則のようである。例えば「たとしへなきもの 夏と冬と(以下略)」の如く、対称的な季を取りあげている章段での順序にも見られるように、時の流れには従っている。これと同様「正月一日は」に始まる冊子の章段配列も、暦日を明示している章段が正月から十二月へと年

間の暦どおりに配されることから始められている。ただし暦日表現のある章段の間には季節として関連する事項を扱った章段が配されている。もつとも、こうした配列方法は格別のことでないもので、誰にも為し得るといえるが、まずは前田家本の方法と捉えておきたい。

また「正月一日」の章段に始まり「つごもりの夜は」の章段へと配列展開され、ひき続いての章段は「人の婿とその御方」と始まるのだが、その結びには

つごもりの夜は、あやしきところだに例よりはをかしきを、ましてよきところ、うちわたりなどはをかしきぞことわりなるかし。(二八五)

とあつて、一年の最終日、しかも夜という時間帯についての随想で終わるといように、時の流れに沿ったものとなっている。そして次には「かへすがへすめでたきものは」の項目、章段が置かれ、新たな展開をしているのだが、そこで初めに提示されるのが「後の御ありさま」であり、これに続くのは「宮はじめの作法」である。こうした叙述法をとることも前田家本の方法の一つと考えておきたい。

なお右にあげた一区切りの目安となる「つごもりの夜」の話が始まるひとまよりは、前田家本にのみ存在している独自章段である。したがってこの章段についての検討もせねばならな

いのだが、この小稿においても季の運行どおり、夏に関する章段から始めることにしたいと思う。

(三)

まずは五月から始めよう。

五月ばかりに山里に歩くこそをかしけれ。草葉も水もげに青みわたりたるに、うへはつれなくて、草の生ひしげりたるを、ながながとたたざまに行けば、下はえなりざりける水の、深うはあらねど、人・牛などの歩むにつけて、とばしりあがりたる、いとをかし。

左右にある垣に、ものの枝などの、車の屋形にさし入るを、いそぎとらへて折らむと思ふに、ふと過ぎてはづれぬるも、いとくちをし。蓬の、車におしひさがれたるが、輪の舞ひ立ちたりけるに、近うか、へたるも、いとをかし。

(一五七・八)

右にあげたひとまよりは、能因本、三卷本両系統ともに、ほぼ同様の内容で存在している。即ち、(1)目に入る色彩が「青」であること、(2)草の繁っている下に深くはないが水があつて進むにつれ飛び散ること、(3)牛車に枝がさし入ること、(4)蓬が車輪にひっかかって近くにまわって来ること、これら四点は、本文上に多少の相異はみられるものの、殊更に問題視することは

ないようだ。ただし、この章段に限ったことなのか、前田家本と三巻本とが近い様相である。これに対し、堺本は少々異質で、(2)と(4)との二点にはほぼ同じ内容をあげた後、次のように時鳥の声をとりあげている。

さて、いきもてゆけば、たかきどもなどあるところになりて、ほととぎすのいとらうらうじうかどあるこゑにうちなきたるは、あないみじ、と心さはがしくおぼゆかし。

(一五一)

なおこの他の(1)については、前のひとまとまり、草を持ち運ぶ者について述べている文章に続いて、

よのなかなべてあをくみえわたるに、ところどころうるはしくはあらぬかきねどもに、うの花のえだどもたははにさきかかりたるなどよ。(一五〇)

とあって、「あを」即ち緑と卯の花の白とのいわば襲の色目そのものの様相を述べ、きちんとはしていない垣根とこぼれるように咲いた美事な花との取りあわせを印象深いものとして記していて、他の三系統本とは少々視点を異にしているといえる。つまり、五月の山里歩きに関する章段は、堺本が他系統本に重なりながらも特異性を有しているといえるわけである。その相異は時鳥の声と卯の花との二点の有無であり、この二つを扱ったまとまりは、堺本以外の三系統ともに別章段として存在して

いる。その章段とは「五月の御精進のほど」と始まるもので、日記的章段に類するものである。以上をまとめてみるに、五月の風物を随想として記した堺本本文に対して、その他の系統の場合は、体験を採りあげ記録的な意味を持つ本文となっているということになる。このことは堺本の性格を確認することには他ならず、改めて指摘するまでもないようでありながら、堺本とその他の本文との関係を示していると捉え得ることで注意はしておきたい。なお、この件について次のような推測をつけ加えておこう。

先ずは、理念としての五月の風物列記があり、その中から特筆すべき出来事の中核素材で二つ取り出されたのだと。こうした流れを想定させるのが前田家本なのではなからうか。即ち、時の流れを基に成り立っている作品が、季の移ろいへの随想的視点を出发点として、日次という、まさに時間的経過そのものを導入することによって、歴史的視点が拓かれていった、その軌跡を前田家本にみるのが出来るのではないかと考える。

次に、日記的章段の「五月の御精進のほど」をとりあげてみよう。

(四)

「五月の御精進のほど」と、先ずは時季が提示され、その後

に「職におはしますに」と中宮の居所が明示されて始まる章段は、日記的章段を有する三系統のいずれの本文においても他に存在していない。確かに中宮は職在住ではあるが、「職におはしますころ」と始まる章段とは区別された冒頭表現として捉えられなければならないまい。この章段においては職在住であることよりも「五月」という時季が重要だといえる。次に続いている「御精進」や「職」は「五月」を特定する働きをしているのだが、これは例年の行事であり、その為の御座所移動を示しているとは解してさしつかえなからう。

では「五月」にはどのような意味があるのだろうか。とりわけ中宮定子にとって、「五月」は格別の月となった次第をみてゆこう。

『小右記』⁽⁶⁾の長徳二年五月二日の条に次のような記事がある。

中宮権大夫扶義云、昨日后宫乗給扶義車藤下其後使官人等

参上御所、搜檢夜大殿疑所々放組入板敷等旨實檢云々、奉

爲后無限之大耻也、又云、后昨日出家給云々

右にみられるように、実資が「無限之大耻」と評した出来事、中宮御所の限ない搜檢は、隆家、とりわけ伊周の逃隠によるものであったようだが、結果的には定子の出家という事態を招くことになった。このことは周知の事実で今更にこと新しいことではないのだが、確認しておきたいのは、「五月」は定子にとつ

て境遇の暗転時の意味をもつということ、しかもその時は父道隆を失った一年余り後のことである。父の死の直後ではないことを注意すべきであろう。

暗転のドラマは五月という生氣に充ちた時季に起こった。山里あるきの愉しさも、「節は五月五日にしくはなし」の断定も、長徳二年以降にはあてはまりにくいように思われる。従って「五月の御精進のほど」の章段年時を従来の長徳四年より遡った長徳元年と捉えてみたいと思う。

このように考えた時に不都合な点は何であろうか。先ずあげられるのは次に列記する官職表記についてであろう。

- (1) 侍従殿やおはします。(三二七)
- (2) 藤侍従の一條の大路はしりつるほど語れば、……(三二九)

- (3) 藤侍従、ありつる卯の花につけて、卯の花の薄様に書きたり。(三二九)

右の用例中、特に問題だと思われるのは(1)である。前田家本では、この呼びかけのことばは「いひ入れたれば」との叙述を伴っており、清少納言自身のことばと考えた方がよく、それだけに官職はその時のものとならざるを得ないだろう。これに対し(2)と(3)とは、いずれも地の文であり、執筆時を考慮するならば、厳密な官職表記ではないと考えてもよさそうである。

ところで、官職表記によって描かれている人物で重要なのは伊周だが、この章段では「内大臣殿」と「大臣」^{おと}が用いられている。この表記に関して

この時内大臣は前官であつたはずである。(三三二)

との指摘は『前田家本枕冊子新註』の頭註にみられるが、多くの問題にはしてこなかったようである。

確かに『前田家本新註』の立場はこの章段の年時が伊周の大宰権帥左遷の長徳二年四月以降であることを明かにしているものの、そのズレの意味までは提示していない。格別に扱われることなくすんでいるのだが、三系統ともに相異なる表記で、「前官」が用いられているのであるから、そこに何らかの意味があると考えなくてはならないだろう。もっとも私の立場は年時的にズレはないと考えるものではあるが。

そこで「内大臣」の官職表記と伊周との関係をあらためてみておくことにしよう。なぜなら伊周が「内大臣」と表記されるのは、三巻本の場合、この章段および跋文中での用例のみである。能因本の場合も同様である。つまり伊周は枕草子中では「大納言」として描かれているといつてよいようだ。というのは、「淑景舎東宮に」の章段でも伊周は「大納言」と表記されているのだが、この場合には実際上は「内大臣」であつたはずである。この二つのズレから、枕草子において官職表記は章段

の年時推定の拠り所とはならないというべきかもしれない。ただし、その表記が用いられたことの意味は作品として当然あるはずと考えるので、ここで、それぞれの意味を考えてみることにする。

まず「淑景舎東宮に」の章段の場合からみよう。淑景舎(皇子)が東宮のもとに入内したのは長徳元年正月十九日のことで、伊周はこの前年の正暦五年八月に内大臣になっている。これらは歴史的事実であるわけなので、この章段で伊周が前官で表わされるにはなんらかの意味があると、とりあえずいえる。

ここに扱われた晴がましい華やいだ一件、姉と妹とが后と妃として宮中で対面した日の有様を描いた章段の中で、中宮定子と東宮妃原子以外で、というよりこの章段中で最も重要な人物は道隆であるといえる。中心人物であること(中関白家を掌握している者という意味)で、道隆は「殿」と表現されている。

この呼称は、晴やかな場でありながら、それが親子の集合という極めて私的な様相を呈していることを示している。公的には関白である道隆が「殿」という呼称で叙述されているので、「内大臣」という別格の官職表記では子息伊周を扱えなかったというところではなからうか。

では「五月の御精進」の場合はどう考えられるであろうか。ここでの「内大臣」には、とりわけの意味を見るべきというの

が私の解である。

父道隆亡き後、中関白家の中核としての存在が伊周である。だが彼は余りにもあっけなく失脚してしまった。「内大臣」としては為すこともなかったといえるだろう。正暦五年(九九四)八月に任官して、長徳二年(九九六)四月には大宰権帥に貶されておき、わずか二年足らずの官位でしかない。もちろん「内大臣」は令外官なので名譽職といえなくもないのだが、大臣としての威力を発揮する可能性はあつたはずである。その微しを「五月の御精進」の章段にみたいと思う。

「……いまはこの事思ひかけ侍らじ」などいひてあるころ、
庚申せさせたまひて、内大臣殿、いみじう心まうけさせ
たまへり。(三三二)

右の文章中の「この事」とは時鳥の詠歌のことで、三巻本は「歌の事」と明確に表現しているが、清少納言がとうとう和歌を詠まなかったにもかかわらず、中宮から「われは詠めともいはじ」とのお墨付きを得てしまったその頃、めぐって来た庚申に、伊周が熱を入れていた経緯を示している。注意しておきたいのは、庚申の行事の主催者は中宮、「心もうけ」するのは伊周という関係である。いうまでもなく、ここには後見の姿勢がうかがえるわけで、父道隆亡き後、当然のことではあるが、「いみじう心まうけ」の表現からは伊周の特別な思いが読みと

れる。この伊周に関しての表現は、果して長徳四年の時点がふさわしいだろうか、疑問である。大騒動があつて再び京に戻ることになった翌年とはいえ、その余韻を微塵も見せない程の人物であつたとは考えられない。また清少納言の言動も、いかに彼女が能天気だとしても、そうした時期としての翳りがなさ過ぎるように受け取れる。一方、長徳元年のことと想定した場合、服喪期間中ではあるものの、道隆の死からは一カ月程経過しており、それなりの日常に戻りつつあつただろうし、沈みがちの宮の心をまぎらわすには格好のエピソードとなつたはずであると思われる。

ここに用いられる「内大臣」は、中宮を後見する者として、また、その後の失脚をあぶり出す装置として用いられたのであろう。

次に「侍従殿」についてであるが、長徳元年は藤原誠信がこれにあたる。従来の推定年時から公信とされて来た。だが一条殿に住む人物としても誠信は相応しい。彼は正暦二年から長徳三年正月左衛門督に任じられるまでの期間「侍従」である。

右にみて来た二つの官職表記によって、「五月の御精進」章段を長徳元年と想定して無理はないといえるが、このことを補強する意味で注目したいのが『小右記』の長徳元年(日記の年号としては正暦六年)五月七日の条の記事である。それは権大

納言道頼(山の井の大納言)が「故関白御服装束」そして「横
 櫛毛車」を用いるべきか否かを問いあわせて来たことを知らせ
 てくれる。この記事の月日が、五月七日であり、服喪に關して
 の牛車が話題にされていること、問いあわせて来た人物が道頼
 という三点は、一輛とはいえ服喪期間中に牛車を仕立てさせた
 (「宮づかさに車の事いひて」の叙述がある) 中宮への批判の
 存在が推定されるだろう。確かに、卯の花の牛車はかなりの話
 題性をもったはずである。証人となるべく呼び出された「藤侍
 従」は話題提供の役を果たしたに違いない。この卯の花の牛車の
 一件と『小右記』の記述との関連を想定しておきたい。

ところで、藤侍従からは和歌が贈られていた。その和歌は、
 前田家本と能因本とには記載があるが、三卷本の場合は「此歌
 おぼえず」となっていて、和歌そのものは明記されていない。
 この藤侍従の歌の有無について、三卷本は「初校本文⁷」との
 解釈があるが、反対に消去された本文と考えることも可能な
 はずであり、故意の省略と考えれば、作者の藤侍従への侮辱性
 はより増強することとなるのではなからうか。⁸ なお、記載された
 和歌そのものについても一語に相異がみられる。前田家本の場合
 をあげてみる。

ほととぎす鳴く音たづねに君ゆくと知らば心をそへもし

てまし (三三〇)

これに対し能因本の場合は傍線部が「聞かば」である。「知る」
 と「聞く」との相異で、どちらにしても情報を受け取ることな
 のだが、「聞く」は情報手段が耳によるものと限定しているとは
 いえよう。たった一語の相異で、しかも意味するところに大
 きな違いはなく、いわば感覚的相異とはいえるかもしれない。
 しいていえば、身体的器官を想像させる「聞く」よりも理念的
 な「知る」の方が、「ものす」の表現をもつ社会では受け入れ
 易いかもれない。この和歌をめぐる本文相異は、枕草子
 が作品であることを今更ながらに確認させてくれる。即ち、事
 実の記録ではないのだから、なんらかの操作はあるはずだとい
 うことである。

ここで問題点を整理しておこう。まず和歌の有無、二系統に
 存在し、残る一つの三卷本は「此歌おぼえず」である。この状
 態の捉え方として、忘れられた歌が明かになったとするか、わ
 ざわざ忘れたものとするかの相反する方向が考えられる。これ
 については、既に述べて来たように、和歌を有しない三卷本を
 最後と位置づけてみたい。和歌の存在する本文から無い本文へ
 の流れを、単に推埒された結果と考えることもできるが、他の
 人の作品に手を入れるより省略した形をよしとしたと捉え、そ
 の前段階として、「聞く」から「知る」への一語の相異が生じ
 たと推定することにした。

以上「五月の御精進」の章段を通してみえることの一つに、本文作定の順序があらうかと思うが、余りにもささやかな問題点に過ぎないので、次に同じく夏季の六月の出来事を記した「小白河」章段を検討してみよう。

(五)

「小白河といふところ」で始まる章段も堺本を除いた三系統ともに存在する。前田家本では四分冊の中の一冊の最初に位置し、この章段の事件年時が寛和二年六月であることから、この日記的章段のまとまりの一冊も時間経過にしたがっての章段配置と考えられる。このことをまずはおさえておこう。

ところで、この章段で問題としたいのは次の二点である。一つは、この場集った人物の中の一人の人名についてであり、もう一つは「六月」という時季に関することである。

まず人名について、二通りがある。

a やすちかの宰相なども、みな若やぎだちて、すべてげにみなたふとき事のみにもあらず、をかしき見物なり。

(二四三)

b 安親の宰相なども、わかやぎだちて、すべてたふとき事の限りにもあらず、をかしき物見なり。(二七)

c 佐理の宰相なども、みなわかやぎだちて、すべてたう

たきことのかぎりもあらず、おかしき見物なり。(四三)
a は前田家本、b は能因本、c は三巻本の本文で、二系統が「やすちか」となっている。

この相異については事実上からいえば「佐理」が正しいことになる。即ち、安親が参議に任じられたのは永延元年(九八七)十一月のことであり、既に天元元年(九七八)に任官していた「佐理」が「宰相」に合致している。ただ、ここで問題としたのは、ことさらに「佐理」が名指される必然があるかどうかということである。この一文は「をかしき見物」として「わかやぎだちて」ふるまっている人物を取り出しているといっている。二人の年齢をみておこう。

『公卿補任』では、寛和三年(この年の四月五日に永延元年と改元)に年齢注記があり、佐理は「四十四」、安親は「六十六」である。「小白河」章段の年時はこの前年にあたるから、佐理は四十三歳、安親は六十五歳ということになり、若々しくふるまうことと年齢との関係において、佐理の場合は無理がないようであるが、七十歳に近く、かなりな高齢である安親の場合、その落差はかえって増大する。このことから、それぞれの本文の性格がうかがえるだろう。即ち、事実と違わず無難な三巻本と、表現意図がうかがえる能因本、前田家本ということになる。ここでの判断基準は事実との合致からの正誤ではない。

二系統にある本文で考えられることもあるだろうというとの立場である。一案として、執筆時に既に安親は故人であったので、最終官の参議すなわち「宰相」として表現したとの解を提示しておきたい。安親は長徳二年(九九六)三月に薨じている。なお執筆時期についても問題とすべきことはあるが、いずれにしても長徳二年の騒動を経た後のはずなので、故人扱いとならざるを得ないといえよう。

次に問題としたいのは、「六月」という時季のことである。特に「六月廿餘日ばかりに」の章段との関係を考えてみたい。この章段は前田家本と堺本とにみられ、能因本、三卷本には存在しない。次に本文を記してみる。

六月廿餘日ばかりに、いみじう暑かはしきに、蟬のこゑ、せちに鳴き出だして、ひねもすに絶えず、いさゝか風のけしきもなきに、いと高き木どもの木暗き中より黄なる葉の、一つづつやう／＼ひるがへり落ちたる、見るこそあはれなれ。一葉の庭に落つる時とかいふなり。(二五九・二六〇)

これは、暑い最中、蟬の声がし、無風状態にもかかわらず、繁った木から黄色い葉が翻り落ちる様子を見ての想いを記している文章で、この主旨も堺本は相異はない。ただ注意しておきたいのは傍線部分の本文が異なることである。堺本は

秋の露おもひやられて、をなじ心に(一五三)

となっている。文中の「をなじ心」とは、「古今集」二五九番歌の

秋のつゆいろ／＼異にをけばこそ山の木の葉の千種なる
らめ^⑨

に同調するということであろう。つまり堺本は、季節(晩夏)は暑さの極まった時ではあるが、眼前を落ちて行く色づいた木の葉を次の季節を先取りした物と捉え、時の移ろいそのものに對する「あはれ」の感情を示しているのである。これに對し、前田家本の一文「一葉の庭に落つる時とかいふなり。」は單なる時の流れをいうのではなく、人意的意味が含まれていると捉えるべきであろう。『前田家本新註』の頭注で「ここに該當しない^⑩」としているもの、引用されている二つ『淮南子』「説山訓」と『文録』の語句は比喩的に解すれば関連が生じるのではなからうか。即ち「歳之將暮」や「天下秋」は終末や凋落の意味にならう。なお、「梧桐一葉」について『漢文名言辞典』(平成七年 大修館)では次のようにしている。

〔群芳譜、木譜、梧桐〕

如^キ其時立秋^ニ至^ル期^ニ一葉先墜、故^ニ云^フ梧桐一葉落、天

下^ニ尽^ス知^ル秋^ヲ

いずれにしても前田家本の場合「落つる時」との表現であることを注意せねばなるまい。この章段末の本文の相異は、堺本

から前田家本への流れを推測させ、その間に「天下秋」を比喩的に受け取るような状況変化があつたであろうことをも想像させる。

ところで、この「六月廿餘日ばかり」の章段に続いては「いみじう暑き晝中に」と始まる一章段がある。『前田家本新註』は「また、手やみもせず」以下を別章段としているが、このままとまりも「いみじう暑き晝中」の行動から連続した叙述と考えることは出来るだろう。とすると、次の章段は「南ならずは」と始まるひとまとまりとなる。この展開は堺本、三卷本ともに同じである。ただし、本文的には、前田家本は堺本とはほぼ同じで、この二系統に存在する叙述が三卷本にはみられないとの現象をみる。このことから、前田家本の位置が推測されるだろう。即ち、前田家本は三卷本に先立って成つていただろうと。

なお、能因本にはこの一連が存在しない。だが、いずれの系統本にも見られる「いみじう暑ければ、よろづのところあけながら」と、暑さの残る夜明け方の描写をする一章段が「小白河」章段の次に位置しており、これは三卷本も同じで、堺本では「南ならずは」の次である。このことは、「小白河」章段が「六月」という月を表徴するものとして機能するようになって、「六月廿餘日」の章段が失くなったことを推測させるように思う。

(六)

以下「五月の御精進」と「小白河」との二章段を、前田家本の配列の上から考えてみよう。

「小白河」章段は第四冊の最初に、「五月の御精進」は終わりに近く位置している。前田家本でこの二章段は、いわゆる日記的章段群を枠どる格好になっているといえよう。というのは、「五月の御精進」の後に続く「御方々、君達、うへなど」と「中納言殿、まゐらせたまひて」との二章段は、清少納言自身の個人的な記録の意味を持つような内容、即ち、一人の人である中宮から、一に思われよとの言葉をかけられたことと、中納言（隆家）とのエピソードで、いささか楽屋落ちの趣きをもった章段である。特に最末尾に位置する「中納言殿まゐらせたまひて」の一章段は

かやうの事こそは、かたはらいたき事のうちにも入れつべけれど「一つおとすな」と侍れば、いかがはせむ。（三五）

と結ばれており、自讃となつてしまっただけではなく、後宮の話題としては極めて限定されていることで採録は遠慮されたが、「一つおとすな」との提言（主体は不明）があつたのだと、弁解がましい筆つきで締め括られている。ここにこの作品の方針

が垣間見えているといえるだろう。⁽¹⁾とすれば、この二章段を除いた「五月の御精進」が最後に位置する形として章段配列を考えるのがよさそうである。

「小白河」と「五月の御精進」とが相対した配置であることによつて、この二章段の対称性が、まずはあらわれてくるのだが、内容、あるいは扱われている出来事などの要素など類似した点がいくつかあげられるように思われる。それを箇条書きであげてみると次のようになる。

- (a) 季節が夏である。
- (b) 宗教行事が背景として存在する。
- (c) 中心的な場から離れることが扱われている。
- (d) 和歌を話題にしている。
- (e) 牛車が話題の道具だてとして用いられている。

このように項目化出来る程に類似性がみられると思われる。それぞれについて述べることでまとめたいと思う。

(a)は余りにも単純な共通項ではあるが、六月と五月と、それをもつ意味は決して小さいものではない。即ち、六月が小白河の邸での出来事と結びついた時、暦日は限定され、歴史の変換時点が浮かびあがってくる。

さて、その廿三日、中納言、法師になりたまひにしこそ
いみじくあはれなりしか。(以下略)

(二四八)

右に引用した前田家本末尾の文章は、寛和二年六月二十三日の突発事件、花山帝退位を示している。特に前田家本の場合「廿三日」と明記しており、「廿日あまり」とする能因本、三巻本の二系統本よりは記録性がみえるといえようか。この一件は、いうまでもなく、一条天皇即位の時点を示すものである。

この章段に描かれた暑さと、ある種の喧噪とは、この時の実権者義懐の威勢を象徴するかのようであるが、その威光は滅びの直前の輝きに過ぎなかったことを読みとる時、この章段と対に考えられる「五月の御精進」の章段も同様な意図を指摘できるように思う。とりわけ庚申行事について、後宮での定着化⁽²⁾も推定され、それが伊周の「心まうけ」と関連したであろうことは、その存在をこの行事によつて印象づけるところとなったと考え得るだろう。そしてそれは同時に伊周の失脚を照射するものとしての働きをも有する点で、義懐の場合と相似たことである。

次の(b)については「小白河」章段が法華八講という特別な行事を背景にしているのに対し、「五月の御精進」は通例の行事であるものの、場所の異例さにおいて、類同性をいうことができるのではなからうか。

(c)と(d)とは結局のところ中心と周縁の関係ということで、(d)は特に要素として和歌が関わることで別項目としたが、中心的な或は本来的な場所から離れることや離れての行動を描くこと、

また詠歌そのものが叙述されないで和歌が話題となること、これらは周縁を描写する態度として、作品の一性格ともいえるかと思う。

最後に(e)の項目だが、これは奇異さにおいて類同性をいうことが出来よう。「小白河」章段に描かれた牛車は「人寄り來とも見えず」初日から最終日まで存在するという奇妙さを持ち、一方の「五月の御精進」の牛車は「卯の花」を飾りたてる仰々しさでの異様さを持つ。いずれも話題性に富んだ牛車であることに共通性がみられるのである。

以上述べて来た対構造の想定が作者の意図であるか否か不明なのはいうまでもなく、一読解に過ぎないのだが、それが可能であること、更には、そうした意図の存在の可能性ありの本文として、前田家本を捉えてみたいとするのが本稿である。

なお、冬に関する注目すべき章段については後稿とする。

引用本文は以下のものによっている。

前田家本 田中重太郎 前田家本 枕冊子新註 古典文庫

昭和46年

能因本 松尾總 永井和子 枕草子(日本古典文学全集11)

小学館 昭和49年

三卷本 渡辺実 枕草子(新日本古典文学大系25) 岩波書

店 一九九三年

堺本 速水博司 堺本枕草子評釈—本文・校異・現代語

訳・語彙牽引— 有朋堂 一九九〇年

註

(1) 本文文末に列記した書物の引用頁を示す。この場合は能因本で、日本古典文学全集11の枕草子の所載の頁を示す。以下同様。

(2) 正しくは「伝能因所持本系統」とすべきだが、以下、本稿では「能因本」との名称を用い、「伝」および「所持」は省略する。なお、それぞれについても「〇〇本系統」とすべきだが、便宜上「系統」についても省略する。

(3) 能因本二四八頁、三卷本五二頁。

(4) 前田家本についての研究成果として、池田亀鑑博士、楠(光明)道隆氏、田中重太郎氏によつての御論があり、これらに尽きており、今更ながらの感なきにしもあらずながら、あえて杜撰ともいえる考察を試みることによつて判明することもあるのではなからうかと稿をまとめることとした。

(5) 楠道隆 枕草子異本研究 笠間書院 昭和45年4月 六頁
(6) 増補「史料大成」刊行会 小右記 一 臨川書店 昭和43年7月 一六頁

(7) 田中重太郎 前田家本 枕冊子新註 古典文庫 昭和46年6月 三三〇頁 以下書名を『前田家本新註』とする。

- (8) 渡辺実 枕草子(新日本古典文学大系25) 一三二頁脚註に「公信は歌も覚えてもらえない」とあるが、それまでの経過の叙述からの読解のようで、他の二系統の本文には明記されているので、これを故意の省略と考えれば、作者の藤侍従への侮りはより一層のものとなる。
- (9) 小島憲之 新井栄蔵 古今和歌集(新日本古典文学大系5) 九〇頁
- (10) (7)に同じ、一五九頁。
- (11) これを作品成立に関する記述と解すれば、前田家本においても、三巻本、能因本に見られる跋文的要素を有する章段が最末に位置していることになる。
- (12) 天喜三年五月三日に媒子内親王家で開催された物語合が庚申の夜の遊びであり、これを後見したのが藤原頼道であることは、人物関連上から考えるべきことがあるであろう。